
DOWN

俺流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DOWN

【コード】

N4184G

【作者名】

俺流

【あらすじ】

主人公、霧也は気がついてみると、見たこともない部屋に倒れていた……

1 日目

「ん……ここは……どこだ……」

気がついたとき、俺は、見たこともない部屋にいた。

俺の名前は霧也、中学2年だ……なぜここに居るのか分からないが、気がついたら、この部屋に居たんだ。

状況が上手く読みこめないので、まず、辺りを見回すことにした。部屋は、一辺5mくらいの部屋、ほぼ正方形。換気口が部屋の天井に4個ついている。天井には、止め具のような物があり、それが支えているようだ。

大体部屋の構造が分かった俺は、身の回りに何かないか探した。ふと、部屋の片隅に、ボールペン（黒インク）と紙を見つけた、ボールペンは新品のようで、紙はかなり年季の入ったやつだった。何に使うか分からず、そのままにしておいた。

次に、自分の持ち物を調べた。右手には、電波時計。ポケットの中からは、ガムが5個、チョコが1個、ポケットティッシュが2個、20円しか入ってない財布もあった。

何かないか他に調べていると、さつき気づかなかったが、窓があるのも分かった。窓は、古く、開けっ放しになっており、窓付近にはなにか圧力がかかったのか、へこんでいるように見えた。

特に他になかったもので、時計を見ると、もうPM3:00を過ぎていた。その窓を見ると、

夕暮れ空がまぶしかった。時たま、カラスが飛んでいたりするのを見ると、なぜか心が暖かくなった。

「あれ？そういえば、俺の家族は……？そして俺はどこにいるんだ……！！」

誰も返事をしない空間に自分の声が響きわたった……

1 日目（後書き）

はじめまして俺流です。名前の由来は、あるお茶漬けのCMのやつからですが・・・ご了承ください。とても精神的に弱いので、暴言などのコメントなどは、やめていただきたいです。

もしかしたら「こんな小説みたことある〜」と思う
かもしれません。

しかし。自分のオリジナルの作品にしていくので、これからもよろしくおねがいします。

2日目 午前

「ん……朝か……」

唯一、外が見える窓から、ニワトリの鳴き声が朝に起こしてくれた。なんて漫画の起こし方だ……。

朝起きてみても、やっぱり俺は、例の部屋に閉じこめられていた。気になったのだが、天井が低くなった気がする……気のせいだろうか？

部屋で何もすることがなく、昨日見つけたボールペンと紙を手にとって見た。紙をよく見ると、何か書かれている。誰かの日記みただ。それには信じられないことが書いてあった……。

「紙があつたので、出来事をかいていこうとおもっ。ちなみの入って5日目だ。まず第一に、一日一日、天井が下がって来ていること。次に、換気口を外そうとしても、外れないこと。他に、寝ている間に、朝だけ、朝食が突然と置かれている事。昨日まで見えていた窓が見えなくなること。今分かっているのは、コレだけが、明日も書いていこうと思う。」

下を見ると続きが書かれていた。

「今、6日目だが、確実に天井が下がってきている。ギリギリ立っていられるが、170cmある、自分の背丈と同じ高さの天井になっってしまった。」

「7日目だが、ついに立つていられなくなった。体育座りして書いている。そういえば家族はどうなっているのだろうか、僕を搜索しているのかな……なぜ、この部屋にいれられているのだろうか……明日は、どうなるのだろうか、不安でいっぱいだ。僕は、殺

されるのだろうか？明日は、朝3：00ぐらいに起きてみる、どこから朝食が来るのか、見ておきたいと思う。」

「8日目だ……。ついに頭すれすれの高さの天井になってきた。うとうとなつているときに、気づいたが、ガチャと言う音が聞こえた……。それと同時に白いガスがでて、いつのまにか寝てしまったのだが、催眠ガスか？どこかに仕掛けがないか確かめたい。明日は、身動きとれなくなっているのでは？不安だ……。」

「9日目……。うつ伏せになって書いている。もう背中が4cm上くらいに、天井と言うより、壁が迫ってきていると言いたい。よく耳を澄ますと……。人の会話声が聞こえた。どうやらここは、地下なのかもしれない。叫んでは見たが、聞こえないらしい。朝食もなくなった、もう死ぬのかもしれない……。明日が怖いよ……。もし入ってくる人が居たなら、僕の敵討ちのためにも、コレを元に、脱出口を探すんだ……。必ず、犯人を見つけ出してくれ……。」

日記はここで終わっていた、この話が本当か確かめてみようと思いを見回すと、たしかに、食事があった……。換気口は手が届かないため、確かめられなかった……。

この話が本当とすると、身震いがした。この日記の人は誰だ……。どこに行つたんだ、まさかつぶされたのか……。二度目の身震いがした。

とにかく、食事を朝、昼、夜に、とつておこうと思う。

食べ終わると、さっそく壁を調べてみた、たたいてみたが、なにもなく、ふと上を見た……。天井の留め具の部分を見ると、血痕の跡があった……。

2日目 午前（後書き）

かなり急展開の話となりましたが、続きは午後から初めて行きたい
と思います。

2日目 午後〜3日目 夢

「う……うわああああああああああああああああああああああ
！！！！！！」
血痕を見た瞬間、あまりの出来事に、部屋の中に、自分の悲鳴が響いた……血痕を見ると、ここ最近付着した、血ではないか思えた。

とりあえず、おちつきを取り戻し、時計を見てみた。

見ると、ちょうど昼12時を過ぎたあたりだったので、朝のパンと、ポケットに入っていた、溶けかけのチョコを6等分にし、一切れ食べた。昼ごはんを楽しんでいると、まぶたから、一滴の粒が流れ落ちた。

「今頃、皆なにしてるのかな……僕は助かるのかな……
・うとう、お母さん、お父さん、陸（弟）……」涙は、とめどなく流れ、やがて、泣きつかれた。

「よし、どうにかして、脱出口を探し出すぞ！！」決心がついた。改めて持ち物を見直すことにした。

現時点で、朝食のパン3分の1、ガムが5個、チョコ6分の5切れ、ポケットティッシュ2個、電波時計、財布、

そして、部屋には、ボールペンと紙があり、窓は、まだ見えている。財布の中には、20円だけとっていたが、電器のポイントカード。ポケットの中に、なぜか接着剤もあった。

とりあえず、広げてみて何か出来ないか、考えにふけた。するとある考えが思いついた。

それは、まず、何日か、経って天井が手の届く距離になったとき、本当に紙どうりか確かめ、

開く場合、接着剤などでつなげたボールペンなどを、棒とし、その

先端に書いた紙をくつつけ、その紙の内容は、

「なぜ、私はここに、閉じ込められているんですか？もしよければ教えてください、（この時点でおかしいが）あと、何日で死ぬのですか？それも教えてください。」

閉じ込めたやつが、善良ならば、答えてくれると信じ、まさに「一か八か」かけたものだった。

その日の、パンを食べ、眠りについた。

その日は夢を見た。それは、あまりにも残酷なものだった。それは、いままで、この部屋に閉じ込められた人たちの映像だった・・・

ある人は、そのまま、天井に押しつぶされ、血は飛び散り、部屋は赤く染まった。

次の人は、いろいろと試すのだが、結局つぶされた。

そのように流れていくうちに、ある人が気になった。

それは、天井の換気口がなんと外れ、上に消えていったのだ。

ここで夢は、途切れてしまった・・・

2日目 午後〜3日目 夢(後書き)

遅れてしまいましたすみません。ちょっと、ストーリーを、どうしようか、かんがえていました。

今回は、グロテスクな、表現が、最後あるので、苦手な方は、見ない方がいいです。

3日目〜4日目 深夜（前書き）

今回も、少々グロテスクな表現がありますので、ご注意ください。
い。

メッセージ「あの所、こんな風にしたら？」なども待っています。
小説を書くのは初めてなので、表現がおかしい場所もあると思います。
す。そのような所を、変えていきたいので、よろしくおねがいしま
す。

3日目〜4日目 深夜

「なんだったんだあの夢は……あれが本当ならば、おれも……」

上を見上げてみたが、何も、変化はなく、ただ、下がってきてるだけだ。まだ、天井に、届くほどではないが、あと二日ほどたったら、つくのかな？

部屋には、朝食があった。パンひとつだったが、3等分にし、食べた。時計に映った自分の顔を、久々に見てみると、この世の物とは思えない、眼の下は、赤くはれ上がり、充分に、食べ物食べていないため、頬はやせ細り、まるで、あの絵画のようになっていた。見れば見るほど、早く出たいと言う気持ちが強くなり、軽い鬱病にかかりかけた。

今日、明日は、何もやる事がないため、窓目の前に見ていた。すると、鳥が一羽、顔をのぞかせた、久しぶりの外来者？のため、和んでいると、一瞬にして目の前が赤くなった。顔をぬぐうと、袖に血がついた。

「うわあああああああああああああああああああああああああああああああああ……」

思わず、絶叫してしまった。足元には、鳥の顔、胴。周りには血がすこし落ちており、窓付近には、大量の血、そして、無数の羽が飛び散っていた。

あまりの出来事に、気絶してしまった。

気がつくと、鳥の死骸が目の前にあり、鉄の臭さが部屋に充満していた。どうしようもないため、ティッシュでとりあえず、部屋の隅に、ティッシュでくるんでおいた。吐き気がしてきたため、寝ようと思いい、時計を見ると、もうPM3:00だった。そして、眠りについた。

早く寝たため、この部屋に入って4日目の、深夜に目が覚めた。物音がしたためだ。ゆっくりまぶたを広げると、黒い動く物が見えた。やがて、人間であることが分かり、何かしているように見えた。そう、昨日の昼ごろに隅に置いて置いた、鳥の死体を、ゴミ袋にいれ、床などに付いていた血を、拭き取っていたのだ。

ここに閉じ込めたやつかなと思い、勇気を振り絞り、声をかけようと思った瞬間、目の前から消えた。不思議に思い、見回しても何も無かった。時計の、ライトを使い、天井を見ると、換気口のひとつが開いていた……

4日目 深夜〜夕方（前書き）

続きは、すこししてから投稿します。

4日目 深夜〜夕方

「あの穴を使えば、外にでられるんじゃないか……いやっふいふい
いいい！」

そう考えた俺は、まだ少々眠たい眼をこすりながらも、起き上がり、
天井に時計のライトを当てた、

「でもどうやっていこうか、やっぱり天井が手につく日まで待とう
か？」

考えた結果、今はどうしようもないため、やめることにした、し
ばらく天井を見ると、かすかに光が漏れていた、つまり、上には、
部屋があると感じ取った。

その直後、白いガスが出てきた。

「う……あの例の紙に書かれていたガスか……」

ガスの眠りから眼がさめると、目の前にはやっぱりパンが置かれ
ていた。天井も下がってきている。

「ガスが出てきたのは、朝3時のため（あの紙からすると）それと
同時に、天井も下がるんじゃないか？そうすると、朝3時の時より前に
起きて、どうにかして白いガスが出る場所。もしくは、ガスに対抗
する何かをしなければ……」

パンを食べながら考えても、夜にならないと無駄な考えだった。

朝、昼、夕方は何をしようか。そんなことを考えながら、まだ完全
に消えてない窓を見ながら、ゆっくり時間は過ぎていった。

さすがに、窓だけを見ていてもつまらないため、見渡しても、白
の壁の部屋の中を、歩き回っていた。

すると、すっかり忘れていた紙に、自分の今までのこの部屋で起
きた事を書いていった。

書き終わると、もう昼1時だったので、パンを食べながら、チョコ

をひとつ食べた（開くのなら、棒をつくらなくていいと考えたためだ）
久々の糖分に、涙が流れそうになるほどの感動を得た。

また、つまらなくなったため、換気口をひとつ、ひとつ見上げていくと、やっぱり、閉められていたが、ひとつだけ、ボルトが少しキレイなのがあった。（よく見ると）

そこだけ、よく使われるため、ボルトが、少しキレイのだろう。

どっちにしろ、夜活動しないといけないため、時計のタイマーを深夜12時にセットし、ひんやりとつめたいコンクリートの床に寝た。

5日目 深夜〜6日目 深夜(前書き)

いよいよ、ラストに近づいてきました。

もちろん、コレが終わり次第、続きとなるやつをつくっていきます。

5日目 深夜〜6日目 深夜

眠りから覚めると、さっそく行動しようと思ったのだが、最大のミスをしてしまった。そう、5日目じゃまだ、天井がとどかなかつたんだ。

「ああ、何やってんだ俺、明日も早く起きないとな……」
自分にとっては、かなりのショックだった。ショックにより二時間ほど、部屋の隅にうずくまっていたほどだ。

立ち直った俺は、時計が、2時を越えたのを見ると、ガスが出てきそうな場所を予想し、計画を立ててみた。

- 1 ム換気口の開くやつが入ってすぐの所に穴がある。ㇿと、予想
- 2 そこに、事前に噛んでいたガムを突っ込みガスが出ないようにする。
- 3 そこからは、手と足を広げ、壁を押しながら、上に上がっていく。
- 4 もし、なにか扉や、足場があるのなら、かまわずに行く。

と言う、計画を立て、3時になるまで待つてみた。

「ピツ」自分の時計が3時を知らせた、直後に例のガスが、予想した場所から出た。

「ビンゴツツツツッ！！明日は、これで……」
深い眠りについた。

寝ていたときに、また「夢？」を見た。

それは、実に奇妙な物だった、内容は、

薄暗いオレンジ色の光の部屋に、機戒や、よく分からない物や、ス
イツチなど有り、大量に詰まれたパンなどあった。よく見ると、奥
には黒い人影が……

と言う所で終わってしまった。

朝10時に起きた俺は、パンを食べ、あることに気付いた。そう、
部屋が真っ暗なことだ、唯一の光であった、窓が、見えなくなった
ためだった。

「じゃあ、俺が入る前に居た人は、時計のライトを使って、あの紙
に書いていたのか？」

どっちみち、時計の電池残量も気にしないとイケないため、必要
時以外は、使わないようにした。

眠たくなったので、寝てしまった。

「さて、いよいよか……」

時計を見ると。AM2時55分だった。

最終日（前書き）

グロテスクな表現が、あるのをご注意を。

最終日

5分前なので、そろそろ準備しておいた、ガムを食べ始めた。(コレで、うまくいけばいいのだが。)

「3時になれば、天井が、下がってくるはずなので、下がってきた直後に、ガムを、ガスが出る穴に入れ、ガスから防ぐ、その後、換気口の中を上って、出口か何かあるか探す、そして、脱出だ!」
心の中でそう決め、時間を待った。いつもは短く感じる時間が、やけに遅く感じた。

「ピツ」と、時計がなった直後に、ガスが出た。
「ハアツ!」

見よう見まねで、漫画みたいに、声をあげた俺の手につけた自分のガムは、見事に、穴につきまり、少しづつガスがでるようになった。「急いでいかないと、ガスがじきに体を回ってしまう。」
急ぐ俺は、換気口を押し開き、上に向かってジャンプした、暗くて見づらいが、上にある光で、少々見えるようになった直後、横に、はしごがあるのが見えた。

「ラッキイイイイイ」
予想もしなかった出来事に、自分は、感極まって、急いで上がった。
いった。

上がっていくにつれ、光は強くなり、久々の明かりに、目が刺激されるほどだった。

はしごを、上り終わると、はりつめた空気の中、非常に奇妙な空気を漂わさせる扉があった。

「いよいよ、脱出できるのか、さあ、いくぞ!」
扉を、開けると同時に、異様な世界が、眼に入った。

そう、あの夢で見た、部屋と同じなのだ。右を見ると、大量に詰まれたパン。前を見ると、訳の分からない機械など、置いてあった。夢では分からなかったが、血の臭いも漂ってきた。あまりの臭さに、また、吐き気がしてきた。

薄暗いので、なかなか前に進めないが、慎重に進んでいくと、天井に何か、ぶら下がっていた。触ってみると、「ネチヨ」という音とともに、手に何か付着した。

「コレは、血？・・・」

ぶら下がっていたのは、人間の腸だった。

「うあああああああああああ！！」

急いで、手を離し、ティッシュで、血をぬぎとった。

「ハアツ・・・ハアツ・・・何なんだ、この部屋は・・・」

どうにか落ち着き、先を進んでみた。

すると、先にあの夢で見た、黒い人影が見えた。だいぶ、姿が見えてくると、黒いマントを羽織っており、顔はよく見えなかった。体つきからして、男だろう。

突然、男？が、喋った。

「よくぞ、ここまでできたな。」

まるで、ゲームのラスボスみたいな言い方に、心で笑った。

「しかし、この声は、どこかで聞いたことが、あるような。そうか、閉じ込められた時の、会話声の人物か、でもなにか引つかかるな・・・」

そう考えていると、男がまた喋った。

「この部屋は、私の趣味でねえ、どうだいすばらしいだろう。」

最終日（後書き）

今までの、ご愛読ありがとうございました。

コレに続く、小説「DOWN2」を作っていきますので、よろしく
お願いします。

バッドエンドと言う結末を、書いておけば、よかったですね。

書いた後気付いて、訂正しておきました。

では、次回作で、でわでわ〜

追記 「DOWN2」は都合により、削除します。楽しみにしていた人などいたとおもいますが、ほんとうにすみませんm()m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4184g/>

DOWN

2010年11月25日02時41分発行